

平成二十九年 度

和歌山信愛高等学校

入学試験

国 語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 この問題冊子は、1ページから21ページまであります。
開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に記入しなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙を
開いたまま裏返して置きなさい。

〈解答は、句読点や記号も一文字分と数えて記入すること〉

受験番号

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

さまざまな分野で「量的拡大から質的向上へ」と言われるようになって久しい。住宅や公共施設をどんどん増やそうという時代から、その質を高めようという時代が変わったのである。あるいは、教育施設を増やすのではなく、教育の質を高めようというのである。福祉施設を闇雲に増やすのではなく、その質を高めることが重要である。農作物の生産もまた、大量に作るのではなく、質の高いものを作ろうという人が増えている。

こうした変化の大きな要因になっているのが、国内における人口の減少である。長い間、人口は増え続けるものだと考えられてきた。一九七〇年代には人口増加が問題視され、「子どもは二人まで」を推奨する人口抑制策まで打ち出された。こうした努力によって一九九〇年代には人口増加率がかなり鈍化し、二〇〇〇年代からは念願だった人口減少に転じた。冒頭の「量的拡大から質的向上へ」というスローガンが叫ばれるようになったのは、ちょうどこの頃である。

そう考えると、¹時代はとても良い方向に進んでいると言えよう。増えすぎた人口を減らすことができるチャンスである。「安かろう悪かろう」と揶揄された製品や時代から、より質の高いものを生み出す時代へと変化するチャンスでもあるのだ。

この国の国土にある資源だけで日本人が暮らしていくには、人口四〇〇〇万人くらいが適正だという説がある。この人口は江戸時代から明治時代へと移行するころの規模である。このままうまく人口が減り続ければ、この国は二二〇〇年頃には理想の人口規模へと到達する予定だ。

A、²現在の政府は人口減少を喜ばない。経済界もまた人口減少を喜ぶどころか憂えている。人口が減ると、税財源の問題や、^②コヨウの問題、国の活力の問題など、様々な問題が指摘されるようになるだろう。今の仕事有成り立たなくなると心配する人もいるだろう。しかし、それは現在の社会の構造を変えないまま人口が減った場合に生まれる問題である。国を担う人々が、現在の社会構造や、産業構造を変えたくないで人口構造が問題視され、人口を増加させなければ大変なことになる^③警鐘を

鳴らしている。総人口が一億人を下回るようなことがあれば危機的な状況になると煽る。そんな考え方では、人口四〇〇万人が理想であるなどと言ってもほとんど聞き入れてもらえない。

しかし想像してみてもほしい。もし、日本の人口が三億人まで増加していたとして、それが二億人まで減少すると言われれば、きっと政府や経済界は「人口が二億人まで減ったら危機的な状況になる」と言ったはずだ。実際には二億人という「少ない」人口でやっていく術すべはいくらでもあるというのに。同様に、日本の総人口が一億人を下回ったとしても、やり方はいくらでもあるはずなのだ。イギリスの人口が約六四〇〇万人、フランスが約六六〇〇万人、イタリアは約六〇〇〇万人。いずれも人口は少ないが、少ないというだけで、危機的な状況になっているわけではない。

つまり、「減らし方」の問題なのである。うまい減らし方を発明することができれば、われわれの生活を量的拡大から質的向上へと転化させることができるはずだ。規模を【 a 】させつつ【 b 】した生活を実現させる、いわば（縮充）とも言える政策が求められるのである。

縮充時代の課題は④タキにわたるが、³その一つは行政依存型住民の意識を変えることだと言えよう。「まちのことは行政に任せ」が成り立ったのは、人口増加時代に税収が増えて行政職員も増えた時代のことである。これからはそうはいかない。人口は減少し、税収は減っていくだろう。そうになると、役所でも住民からの要望や陳情に全て対応するだけの財源がなくなるからだ。それは、同じく人口が一億人以下だった戦前や明治期や⁴江戸期の地域社会の在り方に近づいていく意識だと言えよう。

それを実現するためには、まちづくりの活動を支える意識を変えることが大切だ。地域の課題は地域に住む人自身が積極的に考えること。また企業に頼んだり、行政に要望したりするのではなく、自分たち自身の活動によって解決すること。それは、同じく人口が少なかった江戸期や明治期や戦前期にこの国で行われていたことなのである。

江戸期の地域社会では、自分たちで地域社会を運営するという意識が定着していた。B、実際に地域における活動はそれぞれに名称がつけられていて、「結ゆい」「講」「連」「座」などと呼ばれていた。「結」は地域の人々が総出で行う協同作業のこと

であり、みんなで協力して道を作る道普請みちぶしんなどもその一つだった。そのほか、田植えや稲刈り、茅葺屋根かやぶきの葺き替えふなども結によって人々が協力した。「講」は講義のようなものであり、自分たちの生活やまちにとって必要なことをみんなで学んでいた。そのうち学ぶ人たちが相互に助け合う組織となり、いざというときのお金を集めておく場へと展開した。金銭的に困った人が現れたら、講に貯めたお金を使ってその人を助けたという。「連」はサロンやサークルのような集まりであり、「座」は同業者組合のような職業人たちの集まりであった。

こうした仕組みは多くの地域で戦前まで残っており、隣組や町内会などの単位で結や講や連や座の活動が展開されていた。冠婚葬祭は地域の人々が協力して実施していた。人々の生活を守る福祉や防災の分野も同様である。特に防災に関しては、地域の人たちが主体となって協力し、その土地の特性に合わせた対策が行われた。地域の同業者組合の動きも活発で、次々と新しい仕事を生み出し、人々の生活向上に貢献するところも大きかった。

状況が大きく変わったのは戦後である。終戦直後に占領軍が日本に入ると、なぜ日本は戦争への道を突き進んだのかを調査した。その結果、結や講や連や座によって強い結束でつながった地域社会が行政や政府や軍部と結びついたことによって、国家総動員の戦争へと向かうことになってしまったのではないかと⑤ ブンセキしたのである。たしかに、日本では一九四〇年頃から町内会が正式に大政翼賛会の下部組織となり、強い結束を利用した相互監視機能によって戦争へと突き進んだ面もあった。そこで、GHQは一九四七年に町内会を解体するように命じた。同時にGHQの指導によって社会福祉協議会が立ち上がったたりPTAが組織されたりした。このことは地域社会が担っていた福祉や教育の役割を別の組織が専任することにつながり、町内会の役割が小さくなることを意味した。

一九五二年に町内会解体令が廃止され、町内会や自治会は正式にその活動が認められることになったが、これまでのように法律で位置づけられた身分ではなく、任意団体として活動することになった。その後、高度経済成長期には、冠婚葬祭や屋根の葺き替えなども企業が担うようになり、「結」の機能がだんだんと産業化されていった。「講」もそれぞれが貯金することはいざという

ときに備えることになり、防犯も民間の警備会社に任せるようになっていった。道普請は当然のように行政に頼むようになり、防災もまた行政の責任において実現してもらわなければならない。5 地域住民は協力して自らの地域で活動する機会をどんどん失っていった。

その結果、地域社会における人と人のつながりは薄まり、孤独死が発生したり、災害時の助け合いがうまく機能しなくなったりした。人口増加時代は増えた人の働くための仕事が必要だったし、住むための家が必要だった。C、地域の人たちが協力して進めてきたさまざまな機能を産業化する必要があったし、多くの人が効率よく住むような構造の住宅を整備する必要があった。企業を集積させた業務地域を作り、郊外の住宅地から通勤させることにもなった。住む場所と働く場所がバラバラになり、座のような同業組合が地域に存在することは稀なまれことになった。こうした課題は人口増加時代に生まれたのだとすると、6 次の人口減少時代こそは理想的な縮充を達成しなければならない。

地域のための活動に携わる人口を「活動人口」と呼んでみるとする。地域の定住人口が減ったとしても活動人口が増えたとすれば豊かな地域社会が実現するのではないだろうか。定住人口が減るなら観光客などの交流人口を増やそうという戦略も悪くないが、それで喜ぶ業種は限られている。D、地域の活動人口比率を高めることによって、主体的な地域運営を実現させ、それにより地域の人たちのつながりを醸成するという戦略があってもいいのではないか。いずれにしても、今の社会構造や産業構造のまま人口減少することは避けた方がいいし、それをもって「人口減少は問題だ」と断定してしまうことはもっと避けた方がいい。日本が〈縮充〉先進国となり、世界の国々に「その手があったか！」と感じてもらえるような事例を示すことによって各国が安心して人口を減らすことができるようにしたい。「人口が増えなければ国際競争に勝てない」という悪しき神話から抜け出す国が増えることをねがっている。

問一 〓線部①く⑤のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。(漢字は楷書^{かい}ではっきりと書くこと。)

問二 本文中の A く D に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使うことはできません。

- ア むしろ イ 例えば ウ ところが エ だから

問三 〓線部1「時代はとても良い方向に進んでいる」とありますが、「時代」はどのような「方向」に「進んでいる」のですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本の人口減少を促進しながら、質の高い生活を目指していく方向。
イ 日本の人口増加を抑制したうえで、物質的な豊かさを追求していく方向。
ウ 日本の人口増加を目指しながら、質の高い生活を実現していく方向。
エ 日本の人口減少を促進しつつ、物質的な豊かさを追求していく方向。
オ 日本の人口減少を抑制しながら、物質的な豊かさを追求していく方向。

問四 ——— 線部2 「現在の政府は人口減少を喜ばない。経済界もまた人口減少を喜ぶどころか憂えている」とありますが、それはなぜですか。解答欄に合うように、本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問五 本文中の【 a 】【 b 】に、前後の文脈を考えて二字の熟語をそれぞれ入れなさい。

問六 ——— 線部3 「その一つは行政依存型住民の意識を変えることだと言えよう」について、次の問いに答えなさい。

I 「行政依存型住民の意識」を変えないといけないのはなぜですか。本文中の言葉を使って五十字以内で説明しなさい。

II 「行政依存型住民の意識」をどのように変えることが必要だと筆者は考えていますか。本文中の言葉を使って五十字以内で説明しなさい。

問七 ——— 線部4 「江戸期の地域社会」とありますが、「江戸期の地域社会」についての説明として不適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 道を協力して作るなど、地域社会を維持するために必要な作業を共同で行っていくことが一般的であった。

イ 生活に必要なことはみんなで学び、社会の構成員同士が互いに助け合うことが当たり前のように行われていた。
ウ ささまざまな職能集団の中で必要な組織を自らで作り、職業人たちが地域で新しい仕事を生み出したりもした。
エ 地域のメンバーの中では、金銭的に豊かな人の財産を用いて、貧しい人々を支えることが定着していた。
オ 人々の生活を守る防災の分野に関しては、地域の人たちが協力し地域に合わせた活動を積極的に行っていた。

問八 ——— 線部5 「地域住民は協力して自らの地域で活動する機会をどんどん失っていった」とありますが、この理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 戦前に存在した町内会が解体させられた代わりに、PTAなどの近代的な組織がその強力な監視機能を引き継いだから。
- イ 冠婚葬祭や屋根の葺き替えなどを請け負う企業が郊外に集積する形で移転し、同業者組合である座が崩壊してしまったから。
- ウ 占領軍が戦前の日本社会の特色として強固な地域社会の結束機能を挙げ、その希薄化を目指す形で戦後日本を統治していったから。
- エ 地域社会における人々のつながりが薄まり、孤独死が発生したり災害時の助け合いがうまく機能しなくなったりしたから。
- オ 地域に住む人たちが住むための効率性をもとめて進めていった住宅整備が、どんどん高層化の方向へすすんでいったから。

問九 ——— 線部6 「次の人口減少時代こそは理想的な縮充を達成しなければならない」とありますが、これを達成するために筆者が提言していることを本文中から六十字で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

翌日、同行させてもらった家は、たしかに普通の家だった。特に変わったところのない一戸建ての家に、普及型のアップライトピアノ。でも、1 秋野さんの調律は普通ではなかった。

すごく速い。これまでに見た誰の作業より速い。普通なら二時間弱かかる工程が半分の時間で済んでしまう。調律ってほんとはすごく簡単なことなんじゃないかと錯覚しそうになる。無駄がなく、正確だった。あつというまに調律を終え、外してあった前板を戻し、鍵盤やマホガニーの天板をクロスでさつと拭いた。もともとピアノの上に載っていた※バイエルの教則本をきちんと戻してから、奥の部屋に声をかける。普段からは考えられないほど親切な様子で依頼主の女性と話し、一年後の調律の大まかな日時を決めた。

そうして、愛想よく家の玄関を出た途端に、いつものそっけない秋野さんに戻った。少し離れたところに停めた車まで、並んで歩く。

「べつにおもしろいもんじゃなかったでしょ」

いえ、と僕は言った。

「おもしろかったです」

「そう？ 2 僕はおもしろくなかったけどね」

「すみません」

謝ったら、

「ああ、そういう意味じゃなくて」

秋野さんは軽く手を振った。

「速かったでしょ。あの家は、音を合わせるくらいで特別なことはしないんだ。見た？ 小学生の子供がバイエルを弾いてるんだよ」

教則本があったのは見た。でも、小学生がバイエルを弾いているのはめずらしいことじゃない。めずらしくないからおもしろくないのだろうか。

「椅子の高さを見たらわかったんじゃない？ あの家の子は、もう小学校の高学年なの。それでバイエル。熱心じゃないんだよ、ピアノに対して」

「そういうものなんです」

相槌あいづちを打ったが、わだかまり^aはある。演奏者が熱心じゃないからといって、調律を熱心3にや3ら3なく3て3い3い3わけ3ではない。

それに、僕はバイエルが好きだった。いつだったか、通りを歩いているときに、どこかの家からピアノが聞こえてきた。素直な、やさしい音色だった。ああ、いいなあ、と思ったたら、それがバイエルだった。

「言っとくけど、速いのは手を抜いてるからじゃないよ。僕、音を合わせるだけなら三十分あればじゅうぶんだから」

この目で見ていたから、よくわかる。秋野さんの調律は経験と技術に裏打ちされて、迷いがない。だから速い。

「前に、客先によって調律を変えるのは納得がいかないみたいなこと、外村くん言ってたじゃない」

覚えていいのか。意外だった。たしかに僕はそう思ったが、口には出さなかったはずだし、秋野さんが気に留めているとも、ましてや今まで覚えているとも思わなかった。

「普段、五十ccのバイクに乗ってる人に※ハーレーは乗りこなせない。それと同じ。ものすごく反応よく調整したら、技術のない人にはかえって扱いづらいんだ」

車の鍵を開けながら、ささやかな反論を試みる。

「でも、ハーレーだって練習すれば乗れるようになります」

「乗るつもりがあるかどうか。少なくとも、今はまだ乗れない。乗る気も見せない。乗るなら五十ccをできるだけ整備してあげるほうが親切だと僕は思うよ」⁴

もしかしたらそれは間違っていないのかもしれない。

「ほんとうは僕だって、打てば響くように、もつと敏感に反応するように調整したい。でもそれを我慢してる。響かないように、鈍く調整する。鍵盤にある程度遊びがあったほうが粗あらが目立たないからだよ。お客さんに合わせて、わざとあんまり鳴らないピアノに調整してるんだ」

「……はい」

助手席に乗り込んだ秋野さんは、静かにドアを閉めた。

「おもしろくないよ。どうせなら、ハーレーのほうをやりたい」

そう言って、窓の外を見た。

何も言えなかった。できないんじゃない。やらないんだ。

「⁵ だけど、もつたいないです」

黄色い耳栓をつけた秋野さんは、もう返事をしなかった。

【中略】

古くからのピアノのトップメーカーであるリーゼンフーバー社は、納入先での調律には必ず自社の調律師を派遣する。地元の調律師には任せないばかりか、触らせることも嫌う。

調律師はもちろん一流の技術を持っているが、態度がよくないことでも有名だ。名門と呼ばれる自社以外を見下す言動を平気でするのでという。

「名門だかなんだか知らないが、自分とこのピアノは自分とこの社員にしかさわらせないって、そんなケチな話があるかよ。世の中にはごまんとピアノがあつて、調律師がいてさ、そこで正々堂々と勝負して調律の権利を勝ち取ったんならわかる。競わせないんだもんな。いわゆる名門って、その程度なんだなつて。もういいけど。俺たちが目指してるのはそんなところじゃない」

そう言った柳さんは、それからしばらく何か考えごとをしているような目つきをしていたけれど、ちらつとその目を上げて、「俺、今、なんかかつこいいこと言わなかった？」

と聞いた。

「え、いえ、特には」

僕が正直に答えると、

「そっか。まあ、いい」

はは、と力なく笑った。

かつこいいかどうかは別として、柳さんの言いたいことはわかる。名門だ、老舗だ、と **胡座**をかいていないで、純粹に腕のいい調律師が起用されればいいのに、と思う気持ち。でも、実際には、ピアノのことはそのメーカーの技術者である専属調律師が最もよくわかるだろう。

「柳くんさ」

向こうの机から、秋野さんがこちらに向かって言う。

「目指すって、どこを」

銀縁の眼鏡を外してこちらを見ている。

「勘違いしちゃいけない」

「そうですか」

柳さんの返事は、⁶ 疑問形の「か」が少し上がりすぎだった。

「目指すのは僕たちじゃない。コンサートであれ、コンクールであれ、ピアノは弾く人のためにある。そこに調律師が しやしやり出でどうするの」

「しやしやり出るつもりはないですよ。だけど、俺たちにだって目指す場所はあるはずです」

目指す場所というのは、どこのことだろう。少なくとも、僕にはまだ見えない。

「それと、ピアノは弾く人のためだけにあるわけじゃないです」

柳さんは言った。

「聴く人のためにも存在しているんです。音楽を愛するすべての人のために」

事務所が、しんとまった。

眼鏡のレンズを拭いていた秋野さんが顔を上げる。

「柳くん、今、またかっこいいこと言ったと思ってるでしょう」

⁷ ふ、と秋野さんが笑う。その向こうで北川さんも口元を押さえている。

「あ、わかりました？」

柳さんが頭をかく。ふざけたふりをしてこの場を収めるのかと思ったら、話は終わらなかつた。めずらしく、秋野さんが続けた。

「一流のピアニストに自分の調律したピアノを弾いてもらいたい。そういう気持ちは調律師なら全員が持つてるんじゃないの。でも実際にそれができるのは、ほんのひと握りの」

そこで、一瞬、言葉を切った。

「――ほんのひと握りの、幸運な人間だけだ」

幸運、と表現したけれど、ほんとうは何か違うことを言おうとしたのではないか。その場所にたどり着く人間のことを。

秋野さんの机の電話が鳴って、話はそこでぶつくと打ち切られた。

幸運かどうかというなら、僕は幸運ではない、と思う。幸運な調律師と僕とでは、これまでに聴いてきた音がまるで違うだろう。森の中で、熟した胡桃くるみがほとほと降る音。木の葉がしやしやら擦れる音。木の枝に積もっていた雪が解けてちよろちよろ流れ出す音。

正確には、ちよろちよろではない。ちろちろ、だろうか。ちるちるのようでも、るりるりのようでもある。擬音じゃとても表しきれない音を、耳がたくさん知っている。それを無駄だと言うつもりはない。恥じる気持ちもない。ただ、それだけでは足りなかった。決定的に足りなかった。

幼い頃からピアノに親しみ、ピアノに鍛えられた耳と、音楽らしい音楽を聴いてこなかった耳。精度が違うのは当然だろう。だけど、引かなかったのは、そこではない。秋野さんの言葉に躓つまずいて転びそうになった。

調律師なら全員が持っているはずだという気持ち。もしかしたら僕はそれを持っていないのではないか。

一流のピアニストに自分の調律したピアノを弾いてもらいたい、か。――いくら想像しても、僕の調律したピアノを一流のピアニストがステージの上で弾くところをイメージできないのだった。

(宮下 奈都 『羊と鋼の森』より)

注 ※バイエル…ピアノ初心者のための教本。

※ハーレー…排気量の多い大型バイク。

問一 ——線部1 「秋野さんの調律は普通ではなかった」とありますが、どのような点で普通ではないのですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

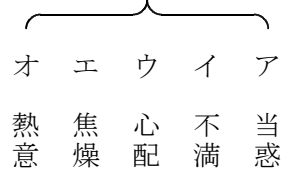
問二 ——線部2 「僕はおもしろくなかったけどね」とありますが、これはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 技術を駆使して調律する価値のない安いピアノだったから。
- イ 自分の技術では満足はいく調律ができないピアノだったから。
- ウ コンサートホールにあるピアノを調律したいと思っているから。
- エ ピアノに対する情熱が感じられない家庭での調律だったから。
- オ 本当は演奏者の技術によって調律を変えることはしたくないから。

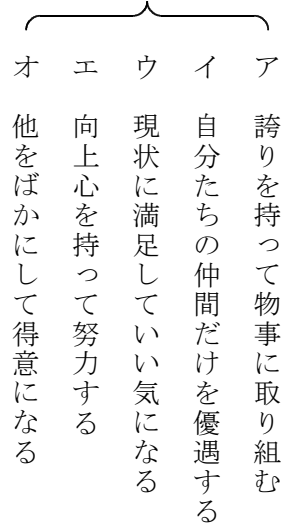
問三 線部 a 「わだかまり」、b 「胡座あぐらをかいて」、c 「しやしやり出て」とありますが、「わだかまり」、「胡座をかく」、「し

やしやり出る」のここでの意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

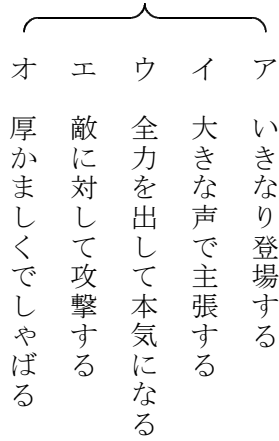
a 「わだかまり」



b 「胡座をかく」



c 「しやしやり出る」



問四 ――線部3 「やらなくていいわけではない」について、次の問いに答えなさい。

I 単語の数を漢数字で答えなさい。

II 形容詞をそのままの形ですべて抜き出しなさい。

問五 ――線部4 「それなら五十ccをできるだけ整備してあげる」とありますが、これはどのようなことをたとえた表現ですか。「それなら」の内容を明らかにして説明しなさい。

問六 ――線部5 「だけど、もったいないです」とありますが、何が「もったいない」のですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 未熟な調律師が高価なピアノを調律すること。

イ 秋野さんがあえて能力を抑えて仕事をしていること。

ウ 秋野さんが自分の技術以上の調律を要求されていること。

エ ピアニストが技術向上の機会を生かそうとしないこと。

オ ピアニストが最低限の調律しかされないピアノを演奏すること。

問七 —— 線部6 「疑問形の『か』が少し上がりすぎだった」とありますが、この『か』に込められた「柳さん」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 落胆 イ 恐怖 ウ 反感 エ 期待 オ 侮蔑^べ

問八 —— 線部7 「ふ、と秋野さんが笑う」とありますが、このときの「秋野さん」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア まじめなことを言う柳につられて、調律師としての働き方を見つめ直した結果、初心を思い出して笑っている。
イ 自分の言葉に酔っている様子の柳に思わず笑いがこみ上げてきたが、柳を傷つけまいとそれを押し殺している。
ウ 自分の言葉に酔っている柳の姿にあえて言葉を発さずにいたが、柳へのあざけりを隠しきれず吹き出している。
エ 柳の言葉は調律師としてのあるべき姿を表しているとは思ったが、大げさな表現に笑いがこみ上げている。
オ 柳の言葉を受けて自らの調律師としての姿勢を反省するとともに、柳の成長をうれしく思っている。

問九 —— 線部8 「その場所にたどり着く」とありますが、これは具体的にはどういうことですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

問十 —— 線部9 「秋野さんの言葉に躓つまずいて転びそうになった」とありますが、このときの「僕」について説明したものと

て最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 調律師ならだれもが持っているという思いが、僕の中には存在しないことに気づかされた。
- イ 言葉では表せない不思議な音ばかり聴いてきた僕は、精密な調律ができないことに気づかされた。
- ウ 幸運に恵まれなかった僕は、本当は調律師になりたくないという自分の気持ちに気づかされた。
- エ 例外を認めようとしないう秋野さんの言葉を聞いて、僕の心の中にある彼への反抗心に気づかされた。
- オ 一流の音楽を聴いたことがない僕は、秋野さんに認められていないということに気づかされた。

三 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

※^{えみし}蝦夷の人に飯を与へしかば、いと喜びながら、※²そこら食ひこぼしてけり。「やよ、米は※³玉の緒つなぐものなるを、¹な¹かくはおろそかになすや。」と問へば、「われらは、米食ひて²命延ばさんとするにあらず。鮭^{さけ}といふ魚食ひて生^いくるを。」と言ふ。「※³さらば、鮭の魚にて命延ばすならば、それを尊ぶべし。いまその足に履きたるものは、鮭の皮より作りたるにあらずや。」と言へば、しばし頭傾けて、「君の足につけ^aたまふ草履とやは、米のなる草より作りたるにあらずや。」と言ひしにぞ、³侮^{あなづ}るべからずと言ひしとぞ。わが国の人は、他所^{よそ}のことを知らねば、蝦夷の人のなりかたち、わが国の人と違へば、いと愚かにて何知らぬものよと思ふ類^{たぐひ}ぞ多き。それより※⁴唐土^{もろこし}にてもあれ、蝦夷の人にてもあれ、ただ姿の見慣れぬを見ては、腹をかかへて、言葉の解し難^{がた}きを聞きては、また笑ふ。⁴心狭く、知らぬ^bゆゑなるべし。

(松平 定信 『花月草紙』より)

注 ※ 蝦夷の人： 関東以北に住んでいた人。

※ そこら： たくさん。

※ 玉の緒： 命。

※ さらば： それならば。

※ 唐土： 中国。

問一 〰〰〰線部 a 「たまふ」、b 「ゆるゑ」を現代仮名遣いにそれぞれ直しなさい。

問二 〰線部 1 「などかくはおろそかになすや」の現代語訳として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア どうしてそんなに急いで食べるのか。
- イ どうしてそのように喜んでいるのか。
- ウ どうしてこのように粗末にするのか。
- エ どうして命をいかげんに扱うのか。
- オ どうして文字もろくに書けないのか。

問三 〰線部 2 「命延ばさん」を現代語訳しなさい。

問四 〰線部 3 「侮るべからず」とありますが、蝦夷の人を「侮るべからず」と言うのはなぜですか。その理由を、次の空欄を埋めて答えなさい。

- 米を (i) と言いながら、 (ii) ている「わが国の人」の矛盾をすどく指摘してきたから。

問五 〰線部 4 「心狭く」とありますが、筆者はどのような人を心が狭いと言っているのですか。説明しなさい。

問六 に当てはまる二字の言葉を本文中から抜き出しなさい。

問七 本文を前半と後半の二段落に分けるとしたら、後半はどこから始まりますか。後半の最初の六字を抜き出しなさい。

一

- ① よくせい
- ② 雇用
- ③ けいしょう
- ④ 多岐
- ⑤ 分析

問二 A ウ B イ C エ D ア

問三 ア

問四 政府や経済界は 現在の社会構造や、産業構造を変

え た く な い から。

問五 a 縮小 b 充実

I

人	口	は	少	し	、	税	収	は	減	っ	て	い	き	、	役	所	で	
も	住	民	か	ら	の	要	望	や	陳	情	に	全	て	対	応	す	る	だ
け	の	財	源	が	な	く	な	る	か	ら	。							

II

地	域	の	課	題	は	地	域	に	住	む	人	自	身	が	積	極	的	に
考	え	、	自	分	た	ち	自	身	の	活	動	に	よ	っ	て	解	決	し
て	い	く	方	向	へ	変	え	る	こ	と	。							

問七 エ

問八 ウ

問九 地域の活動 戦略

二

問一 無駄がなく正確で、作業が速いという点。

問二 エ

問三 a イ b ウ c オ

問四 I 八 II いい ない

問五 反応よく調整されたピアノを弾く技術がなく、やる気もないなら、わざと響かないように鈍く調整するという事。

問六 イ

問七 ウ 問八 エ

問九 一流のピアニストに自分の調律したピアノを弾いてもらうこと。

問十 ア

三

問一 a たもう(たまう) b ゆえ

問二 ウ

問三 命を延ばそう

問四 i 尊ぶべきだ ii 米のなる草で作った草履を足に履いている

問五 姿や言葉が自分たちと違うからと言って笑う人。

問六 他所

問七 わが国の人 は